

“極小造波抵抗問題に関する覚書”

別冊正刊

昭和36年10月18日

目次

1. 緒言
2. 定式化
3. 無限吃水の場合の解の表現
4. 三角級数による解の表現
5. B_{∞} の解析的性質
6. 高速の場合の近似解
7. 低速の場合の解に関する考察
8. 結言

1. 緒言

造船抵抗の極小値を求める問題は実際的にも重要な問題であるが、理論的には、かなり多くの数学的困難があつて、従来の多くの試みにも拘らず、特に低速の範囲で充分満足のおく結論が出ていない状態である。

此の學業まで、最近の研究結果をもとにして、著者自身の考えを述べて見る。

尚此處では一応問題をエッペルハッポツ型の排散型船に限ることにする。

2. 定式化

水面船体中央に原点をとり、船方向を正として x -軸、鉛直上を z -軸をとつ右手座標系をとり、船長 (L) を $2b$ 、船巾 (B) を $2b$ 、吃水 (d) を t 、排水容積 (∇) を δ 、船速 (V) を 1 、此の單位系の重力の常数を g とする。

さうすると、

$$b = \frac{B}{2}, \quad t = \frac{2d}{L}, \quad \delta = \frac{\nabla}{L^3}, \quad F_0 = \frac{1}{\sqrt{2g}} \quad \text{等と定る。}$$

今造船抵抗 R は $\rho(x, z)$ と船体半巾とを $A(z)$ と式(2.1)と定うれば、

$$R = \frac{4\rho g^2}{\pi} \int_0^{\frac{\pi}{2}} |F(\rho \sec^2 \theta, \theta)|^2 \sec^5 \theta d\theta, \quad (2.1)$$

$$\text{但し} \quad F(k, \theta) = \int_{-t}^0 \int_{-1}^1 \rho(x, z) e^{kz - ikx \cos \theta} dx dz, \quad (2.2)$$

ρ は水の密度とする。

今

$$\left. \begin{aligned} P_{2n}(x, t) &= (-i)^n \int_0^{\frac{\pi}{2} - \tan^{-1} \theta} e^{-xz \sec^2 \theta} \sin(xz \sec \theta) \cos^{2n} \theta d\theta, \\ P_{2n+1}(x, t) &= (-i)^{n+1} \int_0^{\frac{\pi}{2} - \tan^{-1} \theta} e^{-xz \sec^2 \theta} \cos(xz \sec \theta) \cos^{2n+1} \theta d\theta, \end{aligned} \right\} (2.3)$$

の特殊函数を導入して、(2.1)の積分順序を交換すれば、

* S. Karp, J. Koliba & J. L. Wray; Man. & Abs. of 3rd Symp. on Nav. Hydro. (Sep. 1960)

in G. Weiskelme und Anders; J. S. T. G. Bd. 51. (1957) ss. 175 ~ 214.

$$R = \rho g \int_{-1}^0 \int_{-1}^1 G(\rho x, \rho z) \gamma(x, z) dx dz, \quad (2.4)$$

但し

$$G(\rho x, \rho z) = \frac{4\rho^3}{\pi} \int_{-1}^0 \int_{-1}^1 \gamma(\xi, \zeta) \sqrt{\xi^2 - \rho x^2} \sqrt{\rho z + \zeta} d\xi d\zeta,$$

$$\text{or } = \frac{4\rho^3}{\pi} \int_0^\pi \sqrt{\rho \cos^2 \theta} e^{i\rho x \cos \theta} \rho \cos^2 \theta d\theta, \quad (2.5)$$

此の G を以下 零多項函数と呼ぶことにしよう。

さて (2.3) からすぐ判る様は R は 2 階の熱伝導の微分方程式を満足する。

$$\left(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \gamma \frac{\partial}{\partial z}\right) R(x, -\rho z) = 0, \quad z < 0, \quad \dots (2.6)$$

従って, (2.5) から G も 矢張り 同じ方程式を満足する。

$$\left(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \gamma \frac{\partial}{\partial z}\right) G(\rho x, \rho z) = 0, \quad \dots (2.7)$$

さて問題は成る点と与らぬ点 (温度と排水量) の下で R を極小にする $\gamma(x, z)$ は如何な形であるかと言う事であるが、實際問題として、理論的には成る R に對して、無限に多くの γ が対応してゐる* ので、是等此の点で困難に逢着する。

此の点をさける爲に少し問題を變形して見よう。

先づ, (2.6), (2.7) の随伴形式によつて、補助函数 σ を導入する。即ち

$$\gamma(x, z) = \left(\frac{\partial}{\partial z} - \frac{1}{\gamma} \frac{\partial^2}{\partial x^2}\right) \sigma(x, z). \quad (2.8)$$

すると此は 1 階熱伝導の方程式であるから、 σ の任意の初期値が境界値を与えらると、 σ と γ は 1 対 1 に対応するから、以後 γ の替りに σ で問題を考へる事が出来る。

それを今

$$\sigma(x, -1) = 0, \quad \frac{\partial \sigma}{\partial z}(\pm 1, z) = 0, \quad \dots (2.9)$$

* 著者: 防大紀要 昭和 31 年 4 月発行予定、以下の議論は此の文を参照。

の様に決めておく。

参考文献で示した様に抵抗を変えない様な σ の変化はあっても、他の境界上で σ が零になる σ で σ の替りに σ を考える事は上述の性質は受けられる事になる。

さて (2.8), (2.9) を (2.1) に代入して $k = g \operatorname{arcc} \theta$ とおくと

$$F(g \operatorname{arcc} \theta, \theta) = \int_{-1}^1 \sigma(x, 0) e^{-igx \operatorname{arcc} \theta} dx - i \operatorname{arcc} \theta \int_{-t}^0 \left[\sigma(x, z) e^{-igx \operatorname{arcc} \theta} \right]_{x=-1}^{x=1} e^{gz \operatorname{arcc} \theta} dz, \quad (2.10)$$

となり、又 (2.5) に代入すると

$$G(gx, gz) = \frac{4g^3}{\pi} \left[\int_{-1}^1 \sigma(x, 0) P_5(gx, -gz) dx - \int_{-t}^0 \left[\sigma(x, z) P_6(gx, -gz) \right]_{x=-1}^{x=1} dz \right], \quad (2.11)$$

又 (2.4) に代入すると

$$\frac{R}{g} = \int_{-1}^1 \sigma(x, 0) G(gx, 0) dx + \frac{1}{g} \int_{-t}^0 \left[\sigma(x, z) \frac{\partial}{\partial z} G(gx, gz) \right]_{x=-1}^{x=1} dz, \quad (2.12)$$

の様に定めて、あつての量 σ によつて書き換へられた。

一方排水量は、(2.8), (2.9) から

$$\frac{Q}{2} = \iint_{-t}^1 \sigma(x, z) dx dz = \int_{-1}^1 \sigma(x, 0) dx, \quad (2.13)$$

となる。

所で、R は (2.11), (2.12) から見る如く、 $\sigma(x, 0)$ は $\sigma(\pm 1, z)$ の値で決まるにも拘らず、条件式 (2.13) は $\sigma(x, 0)$ の総和しか規定していない。

これは、問題として不完全だと考えられる。

此の辺は今後検討すべき問題が残つてゐる様に思われるが、いつれにしても現在の所は実用的な観点から、

Weinblum 等の様に力骨線を一定の型に限定すれば、上の困難は受けられる。

尚 (2.11), (2.12) は (2.7), (2.8), (2.9) 等を考慮して部分積分し次の様に書きかえておいた方が便利であろう。

$$\frac{\partial^2}{\partial x^2} G^{(2)}(gx, gz) = G(gx, gz), \quad \left(\frac{\partial^2}{\partial z^2} + g \frac{\partial}{\partial z} \right) G^{(2)}(gx, gz), \quad (2.14)$$

の極限 $G^{(2)}$ を考えれば

$$\frac{R}{Pq} = \int_{-1}^1 \left\{ \frac{\partial z}{\partial x^2} \sigma(x, 0) \right\} G^{(2)}(qx, 0) dx + \int_{-t}^0 \left[\frac{\partial \sigma}{\partial z} \right]_{z=0} \frac{\partial}{\partial x} G^{(2)}(qx, qz) \Big|_{x=-1}^{x=1} dz, \quad (2.15)$$

$$\left(\frac{\pi q}{4} \right) G^{(2)}(qx, qz) = \int_{-1}^1 \left\{ \frac{\partial \sigma}{\partial z^2} \sigma(\xi, 0) \right\} P_1(q\sqrt{x-\xi}, -qz) d\xi - \int_{-t}^0 \left[\frac{\partial \sigma}{\partial z} P_2(q\sqrt{x-\xi}, -qz+\zeta) \right]_{\xi=-1}^{\xi=1} d\zeta, \quad (2.16)$$

さて、最も簡単な場合として $\eta(x, z)$ が吃水方向に一定である場合の問題を更迭めて考えよう。

此の場合 (2.1) 等から

$$R = Pq \int_{-1}^1 \eta(x) \Gamma(qx, qt) dx, \quad (2.17)$$

$$\Gamma(qx, qt) = \frac{4q}{\pi} \int_{-1}^1 \eta(\xi) K_{-1}(q\sqrt{x-\xi}, qt) d\xi, \quad (2.18)$$

但し

$$K_{-1}(u, \tau) = P_1(u, 0) - 2P_1(u, \tau) + P_1(u, 2\tau), \quad (2.19)$$

(2.13) の条件は

$$\frac{\delta R}{\delta t} = \int_{-1}^1 \eta(x) dx, \quad (2.20)$$

今 η が $\delta \eta$ だけ変化すると, (2.17), (2.18) から R は δR だけ変化して, 2次の項を無視すると

$$\delta R = 2Pq \Gamma(qx, qt) \left\{ \delta \eta(x) \right\}, \quad (2.21)$$

となり, (2.20) から

$$\int_{-1}^1 \delta \eta(x) dx = 0, \quad (2.22)$$

であるから

$$\delta R = 0, \quad \text{for } -1 \leq x \leq 1 \quad (2.23)$$

となる為には

$$\Gamma(qx, qt) = \lambda; \text{ 常数}, \quad (2.24)$$

であれば充分である。

さうすると (2.17) から

$$R = \rho g \frac{\lambda \delta}{2t}, \text{ or } \frac{R}{\rho g \delta} = \frac{\lambda}{2t} \quad (2.25)$$

となる。

3. 無限に浅い水の場合の解の表現

浅い水が無限の時は (2.19) 式は

$$K_{-1}(u, \infty) = R_1(u, 0) = -\frac{\pi}{2} Y_0(u), \quad (2.1)$$

となるので

$$\Gamma(gx, \infty) \equiv \Gamma(gx) = -2g \int_1^x \eta(\xi) Y_0(g\sqrt{x-\xi}) d\xi, \quad (3.2)$$

$$R = \rho g \int_0^1 \eta(x) \Gamma(gx) dx, \quad (3.3)$$

となり、排水量一定の条件は水糸面積一定と看做すから、

$$\int_0^1 \eta(x) dx = \alpha, \quad (3.4)$$

よって R を極小にする問題は (2.24) によって

$$\Gamma(gx) = C; \text{ 常数}, \quad (3.5)$$

となればよい。

此条件 (3.2) に代入すれば特異積分方程式が得られその解は J. Dörfler^{*} によつて与えられてゐるが、此處ではそれと値が異なる証明法を記しておこう。

極小値を与える η は偶函数である事はよく知られてゐるから以下その考へておこう。

$$\text{さて } x = -\cos\theta, \quad \xi = -\cos\vartheta \quad \text{とおいて}$$

$$\eta(-\cos\theta) = \frac{\varphi(\theta)}{\sin\theta}, \quad \Gamma(-g\cos\theta) = \frac{4g}{\pi} G(\theta), \quad (3.6)$$

よって、マロウ函数^{**}によつて

$$\varphi(\theta) = \sum_{n=0}^{\infty} a_{2n} c_{2n}(\theta), \quad (3.7)$$

と展開出来るとするとき、(3.2) から

$$G(\theta) = \text{Re.} \int_0^{\pi} \varphi(\vartheta) d\vartheta \int_0^{\infty} e^{ig(\cos\vartheta - \cos\theta)u} du, \quad (3.8)$$

となる。

* 号記号、式番号にて N.W. Melachlan の Text. に従う。

** Z. A. M. P. Bd. 3, ss. 427~439, (1952.)

↑↑↑

$$\begin{aligned} \text{Fey}_{2n}(z, \rho) &= -\frac{z \text{Ce}_{2n}(\frac{\pi}{2}, \rho)}{\pi A_0^{(2n)}} \int_0^\infty \cos(zt) \cos ht \cos hu \text{Ce}_{2n}(u, \rho) du, \\ \text{Ce}_{2n}(z, \rho) &= \frac{\text{Ce}_{2n}(\frac{\pi}{2}, \rho)}{\pi A_0^{(2n)}} \int_0^\pi \cos(zt) \cos u \cos hu \text{Ce}_{2n}(u, \rho) du, \end{aligned} \quad (3.9)$$

↑↑↑

$$\text{Ce}_{2n}(\theta, \rho) = \sum_{r=0}^\infty A_{2r}^{(2n)} \cos 2r\theta, \quad \frac{1}{\pi} \int_0^{2\pi} \text{Ce}_{2n}^2(\theta, \rho) d\theta = 1, \quad (3.10)$$

又

$$\text{Re. Fey}_{2n}(-i0, \rho) = \frac{\text{Fey}_{2n}(0, \rho)}{\text{Ce}_{2n}(0, \rho)} \text{Ce}_{2n}(\theta, \rho), \quad (3.11)$$

等の関係があるから

$$g = z h = z \sqrt{\rho}, \quad (3.12)$$

とかくと結局

$$-\frac{\pi}{2} \int_0^\pi Y_0(g \sqrt{\rho} \cos \theta) \text{Ce}_{2n}(\theta) d\theta = \lambda_{2n} \text{Ce}_{2n}(\theta), \quad (3.13)$$

$$\lambda_{2n} = -\frac{1}{2} \left| \frac{\pi A_0^{(2n)}}{\text{Ce}_{2n}(\frac{\pi}{2})} \right|^2 \frac{\text{Fey}_{2n}(0)}{\text{Ce}_{2n}(0)} = -\frac{\pi^2}{2 \text{Ce}_{2n}(\frac{\pi}{2})} \sum_{r=0}^\infty (-1)^r A_{2r}^{(2n)} J_r(ke) Y_r(ke), \quad (3.14)$$

とすると 従って (3.8) は

$$G(\theta) = \sum_{n=0}^\infty \lambda_{2n} a_{2n} \text{Ce}_{2n}(\theta), \quad (3.15)$$

とあるが、一方

$$1 = 2 \sum_{n=0}^\infty A_n^{(2n)} \text{Ce}_{2n}(\theta), \quad (3.16)$$

の様な展開が出来るので、(3.5), (3.6) から

$$C = T(gx) = \frac{4g}{\pi} \sum_{n=0}^\infty \lambda_{2n} a_{2n} \text{Ce}_{2n}(\theta).$$

において

$$a_{2n} = \frac{\pi C}{2g} \cdot \frac{A_0^{(2n)}}{\lambda_{2n}}, \quad (3.17)$$

でなければならぬ。

又 (3.4) から

$$\alpha = \int_0^\pi \varphi(\theta) d\theta = \pi \sum_{n=0}^\infty a_{2n} A_0^{(2n)}, \quad (3.18)$$

であるから、(3.17) を代入すると、定数が決まると、

$$C = \frac{2g\alpha}{\pi^2} / \left\{ \sum_{n=0}^\infty \frac{(A_0^{(2n)})^2}{\lambda_{2n}} \right\}, \quad (3.19)$$

従って

$$R = \rho g \alpha C = \frac{2\rho g^2 \alpha^2}{\pi^2} / \left\{ \sum_{n=0}^\infty \frac{(A_0^{(2n)})^2}{\lambda_{2n}} \right\}, \quad g = \frac{g^2}{g}, \quad (3.20)$$

一般に, (3.15), (3.6), (3.7), (3.3)から

$$R = 2\rho g^2 \sum_{n=0}^{\infty} \lambda_{2n} (a_{2n})^2, \quad (3.21)$$

の形になるから, マニラ函数に展開しておく事は便利である
 子けれども, その数表に値する調査は未だしてない。

いづれにしても実用面から先, すべてこの点で有利とは言い難い様である。

4. 三角級数による解の表現

又 (3.6) の $\varphi(\theta)$ を又の三角級数で展開して見よう。

$$\varphi(-\cos\theta) = \frac{1}{\sin\theta} \sum_{n=0}^{\infty} a_n \cos n\theta, \quad (4.1)$$

とおき

$$R_{n,m} = \frac{1}{\pi^2} \int_0^\pi \int_0^\pi \cos n\theta \cos m\theta K^{-1}(g \sqrt{\cos\theta - \cos\theta}, g\theta) d\theta d\theta, \quad (4.2)$$

の極値函数を定義すると (2.17), (2.18) から

$$R = 4\pi\rho g^2 \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=0}^{\infty} a_n a_m R_{n,m}, \quad (4.3)$$

$$P(-g \cos\theta, g\theta) = 4g \sum_{m=0}^{\infty} b_m \cos m\theta \sum_{n=0}^{\infty} a_n R_{n,m}, \quad (4.4)$$

となる。又 (2.20) の条件は

$$\frac{\delta}{2t} = \pi a_0, \quad (4.5)$$

又極値条件は (4.4) から

$$\left. \begin{aligned} \sum_{n=0}^{\infty} a_n R_{n,0} &= \frac{1}{4g}, \quad \text{1 常数} \\ \sum_{n=0}^{\infty} a_n R_{n,m} &= 0, \quad \text{for } m \geq 1, \end{aligned} \right\} \quad (4.6)$$

となる。従つて (4.5), (4.6) から a_n, λ を求めればよい。

此處で更に興味ある問題として, C_b を与えて R の極小値を求めた問題を少し考へて見よう。

さて, 此の条件は

$$C_b = \frac{\delta}{4bt}, \quad (4.7)$$

となるから、逆に考えれば、 b を決めておく事にできる。
即ち(4.1)より

$$b = \frac{f}{4 + C_0} = f(0) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n \cos \frac{n\pi}{2} = \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n a_{2n}, \quad (4.8)$$

この場合も、このラグラングランジアンに未定係数で極値条件は

$$\begin{aligned} \frac{1}{pq} \frac{\partial R}{\partial a_n} - \frac{\lambda_1}{2t} \frac{\partial f}{\partial a_n} - \lambda_2 \frac{\partial}{\partial a_n} b &= 0 \\ b &= \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n a_{2n}, \\ \delta &= 2\pi + a_0, \end{aligned} \quad (4.9)$$

となるから矢張偶函数のみ考えて、此の方程式は

$$\begin{aligned} 8\pi q \sum_{m=0}^{\infty} a_{2m} R_{2n,2m} &= (-1)^n \lambda_2, \quad n \geq 1 \\ 8\pi q \sum_{m=0}^{\infty} a_{2m} R_{0,2m} &= \pi \lambda_1 + \lambda_2, \end{aligned} \quad (4.10)$$

と書ける。従って(4.4)は此の場合

$$P(-f \cos \theta, q t) = \frac{\lambda_1}{2} + \frac{\lambda_2}{2\pi} \sum_{n=0}^{\infty} \epsilon_n (-1)^n \cos 2n\theta, \quad (4.11)$$

($\epsilon_0 = 1, \epsilon_n = 2$ for $n \geq 1$)

$$\text{従って} \quad R/pq = \frac{\pi}{2} \lambda_1 a_0 + \frac{1}{2} \lambda_2 b, \quad (4.12)$$

となる。
ここで(4.11)式中

$$\sum_{n=0}^N \epsilon_n (-1)^n \cos 2n\theta = \frac{(-1)^N \cos(2N+1)\theta}{\cos \theta}, \quad (4.13)$$

となるから、 N を大きくしてゆく、即ち f を段々多くの項で近似してゆく時此の函数は単調な函数に収斂しなっていて段々変化が激しくなっていく。

したがって(4.10)の条件は(4.11)の条件で a_{2n} を決める事であるから、結局 N のとり方で、解はかなり異なって来る事になる。

Weinblum等が実際級数の選び方でかなり異なる解を得ているのは、此の意味における解の不安定さに起因するのではなからうか。

そういう所で数学的には C_0 一定の条件を入れる事は

適当でないという本になる。

然し各々実用的には最も重要な問題の一つであり、然も此の面から考えれば、解が不安定である事は、ある範囲内で多様性を持ってゐると言う事であるから、むしろ便利な点と考えられはしないであろう。

5. $R_{n,m}$ の解析的性質

(4.2) から

$$R_{n,m} = \frac{1}{\pi^2} \int_0^\pi \int_0^\pi \cos n\theta \cos m\theta K^{-1}(g \sqrt{\cos\theta - \cos\phi}, g\tau) d\theta d\phi$$

$$\text{即ち} \int_0^\pi e^{i g \sec\theta \cos\theta} \cos n\theta d\theta = \pi i^n J_n(g \sec\theta) \text{ である。}$$

$$R_{n,m} = \text{Re. } i^{n-m} \int_0^\pi J_n(g \sec\theta) J_m(g \sec\theta) (1 - e^{-g\tau \sec^2\theta}) \sec\theta d\theta, \quad (5.1)$$

$$\text{となるから} \quad R_{n,m} = 0 \quad \text{for } (n-m) \text{ is odd}, \quad (5.2)$$

よって $(n-m)$ が偶数のもののみを考えればよい。
以下に理由あつてその性質を考えてみよう。

i) 漸近展開

今 g が、 n, m より大きい場合は

$$J_n(x) \approx \sqrt{\frac{2}{\pi x}} \left\{ P_n(x) \cos\left(x - \frac{\pi}{2} n + \frac{\pi}{2}\right) - Q_n(x) \sin\left(x - \frac{\pi}{2} n + \frac{\pi}{2}\right) \right\}, \quad (5.3)$$

$$\text{即ち} \quad P_n(x) = 1 - \frac{(4n^2-1)(4n^2-9)}{2!(8x)^2} + \dots$$

$$Q_n(x) = \frac{4n^2-1}{8x} - \frac{(4n^2-1)(4n^2-9)(4n^2-25)}{3!(8x)^3} + \dots$$

よつて

$$\begin{aligned} (-)^{n-m} J_n(g \sec\theta) J_m(g \sec\theta) &\approx \frac{\cos^2\theta}{\pi g} \left[1 + \frac{\cos^2\theta}{64g^2} a_{n,m} + (-)^n \left\{ 1 - \frac{\cos^2\theta}{64g^2} b_{n,m} \right\} \sec(2g \sec\theta) \right. \\ &\quad \left. + (-)^n \frac{\sec\theta}{8g} c_{n,m} \cos(2g \sec\theta) - \dots \right], \quad (5.4) \end{aligned}$$

$$\text{即ち} \quad a_{n,m} = (4n^2-1)(4m^2-1) - \frac{1}{2} \left\{ (4n^2-1)(4n^2-9) + (4m^2-1)(4m^2-9) \right\},$$

$$b_{n,m} = (4n^2-1)(4m^2-1) + \frac{1}{2} \left\{ (4n^2-1)(4n^2-9) + (4m^2-1)(4m^2-9) \right\},$$

$$c_{n,m} = 4m^2 - 4n^2 - 2,$$

式 (5.2) を代入して整理すると

$$R_{n,m} = \frac{1}{\pi g} \left[L_0(0,gt) + \frac{a_{n,m}}{64g^2} L_2(0,gt) + (-)^n K_0(zg,gt) - \frac{(-)^n}{8g} C_{n,m} K_1(zg,gt) + \frac{b_{n,m}}{64g^2} K_2(zg,gt) + \dots \right] \quad (5.5)$$

1) $K_n(u,\tau) = P_n(u,0) - 2P_n(u,\tau) + P_n(u,2\tau)$,
 $L_{2n} = \int_0^{\frac{\pi}{2}} (1 - e^{-gt \sec^2 \theta})^2 \cos^{2n} \theta d\theta, \quad (5.6)$

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos^{2n} \theta d\theta = \frac{(n-\frac{1}{2})(n-\frac{3}{2}) \dots (\frac{1}{2}) \cdot \frac{\pi}{2}}{n \cdot (n-1) \dots 1}$$

又 $I_n(\tau) = \int_0^{\frac{\pi}{2}} e^{-\tau \sec^2 \theta} \cos^{2n} \theta d\theta = \frac{1}{2} \int_0^{\infty} \frac{e^{-\tau(1+p)}}{\sqrt{p} (1+p)^{n+1}} dp, \quad (5.7)$

$$I_{n+1}(\tau) = I_{n+1}(0) - \int_0^{\tau} I_n(\tau) d\tau, \quad (5.8)$$

τが小さい

$$I_0(\tau) = \frac{\pi}{2} (1 - \Phi(\sqrt{\tau})) \quad (5.9)$$

$$\Phi(x) = \frac{2}{\sqrt{\pi}} \int_0^x e^{-t^2} dt,$$

τが大きい

したがって $gt \gg 1$ として e^{-gt} を無視出来るならば

$$R_{n,m} = \frac{1}{\pi g} \left[\frac{\pi}{2} + (-)^n P_0(zg,0) - \frac{(-)^n}{8g} C_{n,m} P_1(zg,0) + \dots \right] \quad (5.10)$$

for $n, m \ll g$, and $g \gg 1$.

ii) ベッセル函数の積による展開 (無限吃水)
無限吃水では (4.2) は

$$R_{n,m} = -\frac{1}{2\pi} \int_0^{\pi} \int_0^{\pi} \cos n\theta \cos m\theta Y_0(g \sqrt{\cos\theta - \cos\theta'}) d\theta d\theta', \quad (5.11)$$

とかけると

$$\pm \tau Y_0(g \sqrt{\cos\theta - \cos\theta'}) = \sum_{r=0}^{\infty} \epsilon_r J_r(g \cos\theta) Y_r(g \cos\theta'), \quad (5.12)$$

したがって

$$\int_0^{\pi} J_r(g \cos\theta) \cos n\theta d\theta = \frac{\pi}{2} \{ 1 + (-)^{n+r} \} J_{\frac{n+r}{2}}(\frac{g}{2}) J_{\frac{n-r}{2}}(\frac{g}{2}),$$

入射波 Doerr. に於ける. 主値の意味で

$$\int_0^\pi Y_r(q \cos \theta) \cos m\theta d\theta = \frac{\pi}{4} \{1 + (-1)^{m+r}\} \left[J_{\frac{m+r}{2}} Y_{\frac{m-r}{2}} \left(\frac{q}{2}\right) + J_{\frac{m-r}{2}} Y_{\frac{m+r}{2}} \left(\frac{q}{2}\right) \right]$$

であるから (5.11) は

$$R_{n,m} = -\frac{\pi}{4} \sum_{r=0}^{\infty} \epsilon_r J_{\frac{m+r}{2}} J_{\frac{m-r}{2}} \left[J_{\frac{m+r}{2}} Y_{\frac{m-r}{2}} + J_{\frac{m-r}{2}} Y_{\frac{m+r}{2}} \right], \quad (5.12)$$

但し, $\epsilon_0 = 1, \epsilon_r = 2$ for $r \geq 1$, r は n が偶数なら 0 から偶数のみを加え合せ, 奇数なら 1 から奇数のみを加え合せ。又 ベッセル函数の変数はすべて $(\frac{q}{2})$, である。
特に n, m が偶数では

$$R_{2n,2m} = -\frac{\pi}{4} \sum_{r=0}^{\infty} \epsilon_r J_{n+r} J_{n-r} \left[J_{n+r} Y_{n-r} + J_{n-r} Y_{n+r} \right],$$

の形になる。

此の級数が収束する事は容易に証明出来る。

しかし, $R_{n,m} = R_{m,n}$ である事が此の展開の儘で一対証明出来ないのでは不便である。

實際に後項の級数例と同じく, $R_{0,2}$ で当てて見た所では $R_{0,2} = R_{2,0}$ になっている様である。

此の展開は特に q の大きい所で数値計算に便利な様であるが, 級数の収束性がたやすく見分けられない点で不便である。

$R_{0,0}$ を $q=20$ で計算して見ると約 20 項で 8 桁の精度が略出て来る。

尚ベッセル函数の表としては J_{20}, Y_{20} 10 桁のものがあるから此れを利用出来る事も有利である。

ii) 積分表示 (無限級数)

(5.1) から無限級数の場合

$$R_{n,m} = \text{Re} \ i^{n-m} \int_0^\pi J_n(q \sec \theta) J_m(q \sec \theta) \sec \theta d\theta, \quad (5.13)$$

以下が

$$J_n(z) J_m(z) = \frac{2}{\pi} \int_0^\pi J_{n+m}(2z \cos \theta) \cos(m+n)\theta d\theta$$

である

$$\int_0^\pi J_n(x \sec \theta) \sec \theta d\theta = -\frac{\pi}{2} J_{\frac{n}{2}} \left(\frac{x}{2}\right) Y_{\frac{n}{2}} \left(\frac{x}{2}\right),$$

であるから

$$R_{n,m} = \frac{2}{\pi} (i)^{n+m} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos(m\theta + i\nu) d\theta \int_0^{\frac{\pi}{2}} J_{n-m}(z g \cos \theta) Y_{n-m}(z g \cos \theta) \cos \theta d\theta$$

$$= -\operatorname{Re} i^{n+m} \int_0^{\frac{\pi}{2}} J_{\frac{n-m}{2}}(g \cos \theta) Y_{\frac{n-m}{2}}(g \cos \theta) \cos(m\theta + i\nu) d\theta, \quad (5.14)$$

となる。尚

$$\lim_{x \rightarrow 0} J_n(x) Y_n(x) = -\frac{1}{2\pi}, \quad \text{for } n \geq 1$$

であるから、 $\nu = \frac{\pi}{2}$ で $n=m$ の場合以外は Integrand は有限である。まづとて、上式は $m \leftrightarrow -m$ としても成り立つから

$$R_{n,m} = -\operatorname{Re} i^{n+m} \int_0^{\frac{\pi}{2}} J_{\frac{n+m}{2}}(g \cos \theta) Y_{\frac{n+m}{2}}(g \cos \theta) \cos(m\theta - i\nu) d\theta,$$

と書きかえても同じである。

此れから前項の極限が出来る事は明らかである。

iv) 級数展開 (無限級数)

(5.13) 式からは又級数展開が得られる。

$$J_\nu(z) J_\mu(z) = \frac{1}{\sqrt{\pi}} \sum_{n=0}^{\infty} (-)^n \frac{z^{2n+2\lambda} \Gamma(n+\lambda+\frac{1}{2}) \Gamma(n+\lambda+1)}{n! \Gamma(n+\mu+1) \Gamma(n+\nu+1) \Gamma(n+2\lambda+1)},$$

であるから今 $\mu+\nu=2\lambda$, $\mu-\nu=2\lambda$, $\mu>\nu$ とおいて、上式をラッランバーニエール積分表示すれば

$$= \frac{1}{2\pi^{\frac{3}{2}} i} \int_{\epsilon-i\infty}^{\epsilon+i\infty} \frac{\Gamma(\lambda-t) \Gamma(t+\frac{1}{2}) \Gamma(t+1) z^{2t}}{\Gamma(t+\mu-\lambda+1) \Gamma(t+\nu-\lambda+1) \Gamma(t+\lambda+1)} dt,$$

但し $-\frac{1}{2} < \epsilon < \lambda$,

(5.13) に代入して θ に相当する積分を実行すると

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \sec \theta d\theta = \frac{\sqrt{\pi}}{2} \frac{\Gamma(-t)}{\Gamma(\frac{1}{2}-t)}, \quad \text{for } \operatorname{Re}(t) < 0$$

よって

$$R_{\nu,\mu} = \frac{(-)^{\lambda+1}}{4\pi i} \int_{\epsilon-i\infty}^{\epsilon+i\infty} \frac{\Gamma(\lambda-t) \Gamma(t+\frac{1}{2})^2 \cos \pi t g^{2t}}{\Gamma(t+\lambda+1) \Gamma(t-\lambda+1) \Gamma(t+\lambda+1) \sin \pi t} dt, \quad (5.15)$$

今 $g \gg 1$ ならば"左半面の留数を計算すれば", 漸近値が得られる

$$R_{\nu, \mu} \approx \frac{1}{2g} + \dots \quad (5.16)$$

となつて (5.16) が 1 項に一致する。
 さて右半平面の留数計算によつて収斂級数が得られる。実行すると

$$R_{\nu, \mu} = \frac{(-)^x}{2\pi} \sum_{n=0}^{\nu-1} \frac{(\nu-n-1)! \left\{ \Gamma(n+\lambda+\frac{1}{2}) \right\}^2}{(2k+n)! (\mu+n)! n!} g^{2k+2n}$$

$$- \frac{(-)^x}{2\pi} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-)^n \left\{ \Gamma(n+\lambda+\frac{1}{2}) \right\}^2 g^{2n+2\lambda}}{(n+\mu)! (n+\nu)! (n+2\lambda)! n!} \left\{ 2 \log g + 2\psi(n+\lambda+\frac{1}{2}) - \psi(n+\mu+1) - \psi(n+\nu+1) - \psi(n+2\lambda+1) - \psi(n+1) \right\} \quad (5.17)$$

今 $I_1 + I_2$ を $R_{\nu, \mu} = I_1 + I_2$

$$I_1 = (-)^x \sum_{n=0}^{\nu-1} C_n g^{2n+2k}$$

$$I_2 = (-)^x \sum_{n=0}^{\infty} (-)^n A_n g^{2n+2\lambda} \left\{ B_n - \log \frac{2g}{g} \right\}, \quad (g) = \pi i - \dots$$

と書く

$$A_0 = \frac{(1-\frac{1}{2})^2 (1-\frac{3}{2})^2 \dots (\frac{1}{2})^2}{\mu! \nu! (\mu+\nu)!}, \quad A_n = \frac{(n+\lambda-\frac{1}{2})^2 A_{n-1}}{(n+\mu)(n+\nu)(n+\mu+\nu)n} \quad (5.18)$$

$$B_{n+1} = B_n + \frac{1}{2n+2} + \frac{1}{2n+2\mu+2} + \frac{1}{2n+2\nu+2} + \frac{1}{2n+2\mu+2\nu+2} - \frac{1}{n+\lambda+\frac{1}{2}}$$

$$C_0 = \frac{(\nu-1)! (k-\frac{1}{2})^2 \dots (\frac{1}{2})^2}{2 \cdot (2k)! \mu!}, \quad C_n = \frac{(n+k-\frac{1}{2})^2 C_{n-1}}{(n+2k)(n+\mu)(\nu-n)n}$$

の値を計算するには"計算に便なりである"。

2, 3 計算 1 元他をあげ"表"。

g	0.2	0.4	0.6	0.8	1.0	20
$R_{0,0}$	2.394486	1.658181	1.208406	.885611	.643353	.0252585
$R_{0,2}$.004932	.011511	.015565	.014211	.005969	—

となる。此の中 $g=1.0$ 及び 0.2 は iii) 項の展開と計算にて一致する事を確かめた。又 $g=20$ の値は iii) 項の展開によるものである。
 (5.18) の展開は g が大きくなると ~~表~~中の項が小さく大きくなり、今 20 行の容量で計算して、小数点以下 5 行の精度をうるには $g \leq 8$ に止めるべきである。

6. 高速の場合の近似解.

高速で $g \rightarrow 0$ の場合は (2.17) ~ (2.19) に代えて, K_{-1} 級数
 数 II

$$\left. \begin{aligned} K_{-1}(gx, \infty) &= P_1(gx, 0) \stackrel{g \rightarrow 0}{=} -\log\left(\frac{8gx}{2}\right), \\ & \times P_1(gx, gt) \stackrel{g \rightarrow 0}{=} -\frac{1}{2}\log\left(\frac{8gt}{4}\right), \\ \text{また} \\ K_{-1}(gx, gt) &\stackrel{g \rightarrow 0}{=} \frac{1}{2}\log\left(\frac{t}{28g}\right) - \log x, \end{aligned} \right\} (6.1)$$

となるから

$$\int_{-1}^1 \frac{\log|x-3|}{\sqrt{1-x^2}} dx = -\pi \log 2, \quad (6.2)$$

この積分があるので 解は直ちに不まり η は次式の形式となる.

$$\eta(x) = \alpha / \sqrt{1-x^2}, \quad (6.3)$$

とすると

$$\int_{-1}^1 \eta(x) dx = \pi \alpha = \frac{\delta}{2t}, \quad \text{or} \quad \alpha = \frac{\delta}{2\pi t}, \quad (6.4)$$

よって

$$\begin{aligned} T(gx, \infty) &= \frac{4g}{\pi} \int_{-1}^1 \eta(z) \left\{ \log\left(\frac{2}{8g}\right) - \log|x-3| \right\} dz \\ &= 4g\alpha \log\left(\frac{4}{8g}\right), \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \times T(gx, gt) &= \frac{4g}{\pi} \int_{-1}^1 \eta(z) \left\{ \frac{1}{2}\log\left(\frac{t}{28g}\right) - \log|x-3| \right\} dz \\ &= 2g\alpha \log\left(\frac{2t}{8g}\right), \end{aligned} \quad (6.5)$$

よって

$$\begin{aligned} \min. \left[R / \rho g \left(\frac{\delta}{t}\right) \right]_{t \rightarrow \infty} &= \frac{g}{\pi} \left(\frac{\delta}{t}\right) \log\left(\frac{4}{8g}\right), \\ \min. [R / \rho g \delta] &= \frac{g\delta}{2\pi t^2} \log\left(\frac{2t}{8g}\right), \end{aligned} \quad (6.6)$$

無限吃水の場合の解は S.Karp (漸近) 等を得たことと同じである。

7. 低速の場合の近似解

低速の場合は g が非常に大きくて、フーリエ級数の項数を充分大きくとると本は計算も面倒である(又 実用上もかなり意味が薄くなる)と考えられる。

そこで仮に (4.1) で 偶函数 整理のみとす

$$\varphi(-\cos\theta) \equiv \frac{\varphi(\theta)}{2i\theta} = \frac{1}{2i\theta} \sum_{n=0}^N a_{2n} \cos 2n\theta, \quad 2N < g, \quad (7.1)$$

とかくと、 $R_{n,m}$ は 大体 (5.5) 或いは (5.10) で与えられる平らな形。
 そのどちらの場合も系が揃は同じであるから 簡潔の爲に以下 無限に近水の場合のみ扱う。

(5.10) を書き直せば

$$R_{2n,2m} \doteq I_0 - \frac{(m^2+n^2)}{g} I_1,$$

$$I_0 = \frac{1}{2g} \left\{ 1 + \frac{2}{\pi} P_0(2g, 0) + \frac{1}{2g\pi} P(2g, 0) \right\}, \quad (7.2)$$

$$I_1 = \frac{1}{\pi g} P(2g, 0),$$

となつて、 I_0, I_1 は g について同じオーダーで且つ、 n, m に関係しない。

(4.6) 式 に 代入すれば

$$\sum_{n=0}^N a_{2n} \left(I_0 - \frac{n^2}{g} I_1 \right) = \frac{\lambda}{4g}, \quad \sum_{n=0}^N a_{2n} \left(I_0 - \frac{n^2+n^2}{g} I_1 \right) = 0, \quad \text{for } m \geq 1$$

となる。 故か (7.1) から

$$\sum_{n=0}^N a_{2n} = \varphi(0), \quad \sum_{n=0}^N n^2 a_{2n} = -\frac{\varphi''(0)}{4}, \quad (7.3)$$

であるから 上式は

$$\left. \begin{aligned} (I_0 - \frac{m^2}{g} I_1) \varphi(0) &= -\frac{I_1}{4g} \varphi''(0), \quad m \geq 1. \\ I_0 \varphi(0) + \frac{I_1}{4g} \varphi''(0) &= \frac{\lambda}{4g}, \end{aligned} \right\} (7.4)$$

となつて、此の上式は m のちがひの他について満足する訳にはゆかない。 即ち 之を 此等の式は漸近式であるから、 g のオーダーを考慮に入れるべきで、今の場合をず(1/2)の位を。

無視してやれば、第1近似として、

$$\varphi(0) = 0, \quad \lambda = O(\theta), \quad (7.5)$$

但し此の後の式は θ のオーダーで零即ち高々 $(1/\theta)$ のオーダーの意味である。以下同様な記号を用いる。

第2近似は上式の条件に更に

$$\varphi''(0) = 0, \quad \lambda = O(1), \quad (7.6)$$

がつけ加わる。

同様にして更に近似を述べれば

$$\left. \begin{aligned} \varphi^{(2n)}(0) = 0, \quad \lambda = O\left(\frac{1}{\theta^{2n-1}}\right), \quad n \geq 2, \\ \text{で此の時} \quad R = O\left(\frac{1}{\theta^{2n-2}}\right), \end{aligned} \right\} \quad (7.7)$$

となる。

(7.5), (7.6) 等の条件は一方で

$$\eta(x) = \frac{\varphi(0)}{\lambda \approx 0} \xrightarrow{\theta \rightarrow 0} \frac{1}{\theta} \left\{ \varphi(0) + \frac{\theta^2}{2} \varphi''(0) + \dots \right\}$$

の様に展開してみよと(7.5)は

$$\eta(-1) = 0, \quad (7.5')$$

となり更に

$$\frac{d}{dx} \eta(x) = \frac{1}{\lambda \approx 0} \frac{d}{d\theta} \eta(-\cos\theta) = \frac{1}{\theta} \left\{ \frac{\varphi'(0)}{2!} + \frac{3\theta^2}{4!} \varphi'''(0) + \dots \right\}$$

であるから、(7.6)は

$$\left[\frac{d}{dx} \eta(x) \right]_{x=-1} = 0, \quad (7.6')$$

の様に書きかえられ、(7.7)は順次 η の逐次微係数が零に近づくを意味し、極点を少なくする為には極点を尖らせればよいと言う直観的な、又理論的な考察と一致する。

此の様な操作を繰り返してゆく事は明らかに C_b がどんどん小さくなる事を意味するから、一方で θ をどんどん大きくしてやると流速の極限に於ける Optimum C_b は無限に小さいと言う様に考えられる。

又一方で(7.5'), (7.6')等の条件に従う函数は無限に多くあるから、此の意味では解は一種の不安定性を示すもの

と考えられる。

此の様な考察から、 g の大きい時に(7.1)の $2N$ を
 g よりも充分大きい所迄とっておく必要のある事が判る。

8. 結言

以上で大体造形桁の極小値問題をとく上に、注意
すべき事柄、及び概要を終る事とする。

まとめて見ると、結局三角級数展開による方法が割合
便利な様に見える。

此の他に、此處では述べなかつたが S. Karp (前出) 等の様に
積分方程式を数値的にとく方法も考えられるが、此の
方法も便利で、もう少し改良検討の余地があるが、一方上の方法
では $R_{n,m}$ が計算出来るから、それによつて任意の桁型の造形
桁の計算が出来る点で便利である。

我々の得た主な結論は、此の問題をとくに当り、 b
一定とする場合は、数学的に解の不安定が生れる事、又
三角級数の項数は常に g よりも充分大きくとるべき事等であ
る。

此の事は例へば、 $g=10(20)$ ならば n を $10(20)$ 以上
と云う事になり、高々 $16 \sim 20 (30 \sim 40)$ 程度とれば"よからう
から偶函数の取扱が之は" $R_{n,m}$ は $30 \sim 50 (100 \sim 20)$ 程度
の最後の聯立方程式は $8 \sim 10 (15 \sim 20)$ 元程度で再定り
ると考えられる。

以上、